

「擬似内発的動機づけ」の概念化可能性を探る：  
自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル構築

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊田, 勝憲 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00009200">https://doi.org/10.14945/00009200</a>

## 「擬似内発的動機づけ」の概念化可能性を探る

－自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル構築－

An Attempt to Conceptualize “Quasi-Intrinsic Motivation”:  
Construction of the Dual Process Model for Autonomous Motivation

伊田 勝憲  
Katsunori IDA

（平成 26 年 10 月 2 日受理）

This paper outlined Self-Determination Theory (SDT) consisting of several mini theories, especially organismic integration theory, basic psychological needs theory and goal contents theory, and discussed some problems about the definitions of intrinsic/extrinsic motivation, and the discontinuity between integrated regulation and intrinsic regulation. In Japan, the two-dimensional model of motivation has been established in which one dimension is autonomy-heteronomy and the other is goal-means. The second quadrant (heteronomy-goal) is “quasi-intrinsic motivation” that has not been recognized in SDT. This paper suggested the new version of two-dimensional classification of motivational model, called “Dual Process Model for Autonomous Motivation”, including integrated regulation as highest type of autonomous motivation, and two types of quasi-intrinsic regulations (aroused by other/oneself). This dual process from heteronomous/controlled motivation to autonomous motivation means that the internalization of task-values occurs simultaneously with the development of interest (from situational interest to individual interest).

### 1. はじめに

教育心理学の研究ではこの数十年にわたって、知的好奇心を土台として学習することそれ自体が目的となっているような意欲、すなわち内発的動機づけ (intrinsic motivation) が望ましいと言われてきた。一方で、この概念が日本で紹介された当初から、内発的動機づけと本人が思い込んでいても実際には外発的動機づけになっているような事例等への懸念が「擬似内発的動機づけ」といった表現によって示されてきた (波多野・稲垣, 1971; 速水, 1998)。しかしながら、こうした指摘が継続的に議論されるには至らず、概念的にも精緻化されないまま今日に至っている。

そこで本論では、内発的動機づけ研究の領域において世界的に最も主要な理論となっている自己決定理論 (Self-Determination Theory: SDT) の枠組みをもとにしつつ、我が国の論考において示されてきた内発的動機づけへの懸念を整理するとともに、興味や価値に関する研究の知見を敷衍しながら、「擬似内発的動機づけ」の概念を精緻化したい。その際、先行研究において指摘されてきた懸念点のみならず、擬似内発的動機づけが発達的・教育的な観点から積極

的な意味を持つ可能性についても理論的に検討する。そして、内発的動機づけと一部の外発的動機づけを包摂する自律的動機づけ (autonomous motivation) 形成のプロセスについて、疑似内発的動機づけの概念を含めたモデルの構築を試み、今後の動機づけ研究の方向性を示したい。

## 2. 自己決定理論の概要と問題点

動機づけ研究のメインストリームに位置づく自己決定理論は、いくつかのミニ理論から構成されている。ここでは内発的動機づけあるいは自律的動機づけの概念化に直接関わる有機的統合理論と、内発的・自律的動機づけの形成条件に関わる目標内容理論および基本的欲求理論の計3つのミニ理論を取り上げる。

### (1) 有機的統合理論

自己決定理論の中で比較的良好に知られているのが有機的統合理論 (organismic integration theory) である。Ryan & Deci (2009) は、相対的な自律性の程度に着目し、最も自律性の低い非動機づけから、中間段階にある外発的動機づけ、そして最も自律性の高い内発的動機づけまでを連続的に描いている (Figure 1)。外発的動機づけと内発的動機づけは、学習が手段であるか、学習することそれ自体が目的であるかによって区分され、外発的動機づけはさらに自律性の程度によって外的調整から統合的調整までの4段階に細分化される。

非動機づけ Amotivation	外発的動機づけ Extrinsic Motivation				内発的動機づけ Intrinsic Motivation
無調整 Nonregulation	外的調整 External Regulation	取り入れ的調整 Introjected Regulation	同一化的調整 Identified Regulation	統合的調整 Integrated Regulation	内発的調整 Intrinsic Regulation
動機づけの欠如 Lack of Motivation	統制的動機づけ Controlled Motivation		自律的動機づけ Autonomous Motivation		
相対的自律性低 Lowest Relative Autonomy			相対的自律性高 Highest Relative Autonomy		

Figure 1 自己決定理論 (SDT) における動機づけの分類 (Ryan & Deci, 2009を参考に作成)

外的調整は、オペラント条件づけのように外的な随伴性によって行動が規定されている状態である。報酬や罰によって直接的に行動がコントロールされている段階であり、学習者にとっては仕方なくやらされているという感覚が強い。次の取り入れ的調整は、外的調整が内面化され、やらなければならないという感覚で行動が生じている状態である。直接的な賞罰によってコントロールされるというよりは、罪や恥といった感覚を回避したり、自尊感情を高揚させたりするために行動する段階と言える。図の3段目に描かれているように、この外的調整と取り入れ的調整の2つの段階は統制的動機づけとして括られ、次の同一化的調整から統合的調整および内発的調整までを括って自律的動機づけとして描かれている。

自律的動機づけの入口に位置する同一化的調整は、自分にとっての重要性や将来的な必要性を認識して学習に取り組むような状態を指す。すなわち、価値の内面化が一層進んで、学習することを意識的に価値づけ、学習者が自ら行動していると感じている段階である。その次に位置する統合的調整は、学習行動が自己の価値観と首尾一貫したものであるとして価値づけられ、学習することの価値が完全に内面化されている状態を指す。Ryan & Deci (2000) では、最も社会

的価値の内面化が進んだ段階として統合的調整を描き、様々な価値や欲求との新しい調和がもたらされることにより、複数の同一化的調整が完全に自己に同化されると述べられている。

この記述は、Erikson (1968) が児童期における同一化と青年期の同一性 (アイデンティティ) 形成の関係について述べている内容を思い起こさせる。Eriksonは、児童期の同一化を単純に足しただけでは、十分に機能するパーソナリティを形成するには至らないとし、同一化という機構の有効性には限界があると指摘している。そして、同一性形成は、児童期の同一化を選択的に拒否し、相互に同化し、新しく配置し直すことから生まれてくると続けられている。さらに、青年期の最後に定着した確定的な同一性というものは、過去のさまざまな人間に対する個々の同一化を超越するものであり、重要な意味をもつ同一化をすべて含むと同時に、それらを作りかえることによって、1つの合理的に首尾一貫した独特の統一体を形成していると結論づけられている。

このように、有機的統合理論における統合的調整は、学習者の心理社会的発達にも関わる概念であり、青年期以降の学習者において立ち現れる動機づけ像として想定するのが現実的であると考えられる。しかしながら、この統合的調整の概念は、自己決定理論の研究史的に見て後から挿入された段階でもあり、質問紙法による測定尺度の開発も極めて少なく、上述したような概念の複雑さからも他の調整段階と同列での測定が難しいのが現状である。また、Ryan & Deci (2009) は、統合的調整について、様々な点で内発的調整と共通する性質を持つとしながらも、興味を土台として学習それ自体が目的となっている内発的調整とは異なり、自己と統合された価値を実現するための手段として学習が位置づけられている点で、あくまで外発的動機づけとして記述している。ゆえに、有機的統合理論の枠組み自体は、内発的動機づけ (内発的調整) が最も自律的かつ最も望ましいものとして広く認識されてきた従来の流れの延長線上にあると言えるが、上述したような青年期における同一性形成を考慮するならば、内発的調整よりも統合的調整の方が発達の後から生じる段階として位置づけられるべきだと考えられる。ゆえに、有機的統合理論におけるこの問題点を考慮した新たな理論的枠組みあるいはモデルの構築が必要であろう。

## (2) 基本的欲求理論と目標内容理論

自己決定理論の中のミニ理論の1つである基本的欲求理論 (basic psychological needs theory) では、自律性の欲求 (need for autonomy)、有能さ (コンピテンス) への欲求 (need for competence)、そして関係性への欲求 (need for relatedness) の3つが基本的な心理的欲求として挙げられている (Ryan & Deci, 2002)。自律性への欲求は、自分の行動は自分で決めたい、自ら行動を起こしたいという傾向性であり、この欲求の充足を促進する働きかけは自律性支援 (autonomy support) と呼ばれ、自己決定理論における中心的な概念の1つとして多くの研究で取り上げられている。有能さへの欲求は、環境との効果的な相互交渉を求める傾向性であり、課題の達成や熟達に伴う認知と感情を含む概念として捉えられる。古くは、White (1963) と Erikson (1950/1963, 1964) がコンピテンスの概念をめぐって相互に引用するなど、パーソナリティ発達と動機づけをつなぐ概念としても位置づけられる。関係性への欲求は、他者と関わって社会と結びつきたいという傾向性のことであり、研究史的には他の2つの欲求よりも後から注目されるようになったものである。前項の有機的統合理論に描かれていた自律性の程度は、価値の内面化の程度と解釈できるが、これら3つの基本的な心理的欲求が

満たされることによって、価値の内面化が促進され、外発的動機づけから内発的動機づけへと（有機的統合理論の図式では左から右へと）移行すると考えられる。

そして、もう1つのミニ理論として目標内容理論（goal contents theory）が注目される。通常、人は複数の領域において課題に取り組んでいるので、課題の数だけ動機づけが存在する（少なくとも測定されうる）が、それら複数の動機づけを説明する上位概念として「目標」を位置づけ、その内容に着目するものである。Kasser & Ryan (1996) は、学習者が価値を置いている目標、特に将来目標あるいは人生目標（life goals）といったその個人の生活全般の目標（personal goals）をその内容から内発的目標（intrinsic goals）と外発的目標（extrinsic goals）の2つに分類した。内発的目標としては、自分自身の成長、他者との関係形成、コミュニティへの貢献といった内容が挙げられ、外発的目標としては、富、名声、身体的魅力などの獲得が挙げられている。Vansteenkiste, Lens, & Deci (2006) は、様々な指標との関連から内発的目標の優位性を示し、例えば、内発的目標はウェルビーイングと正の関連を示すのに対して、外発的目標は負の関連を示すこと、内発的目標と外発的目標の両方の目標を同時に持つよりも、内発的目標のみの方が学習成果や持続性の面で優れていることなどを挙げている。主な知見を総合するとFigure 2のようになり、端的には、内発的目標を持つこと、そして外発的目標は持たないことが望ましいと考えられるが、これらの知見が実験的場面（目標内容の教示等）で多く得られている点には注意が必要であり、両方の目標を同時に追求する必要に迫られることもあると思われる現実場面でのさらなる検討が期待される。

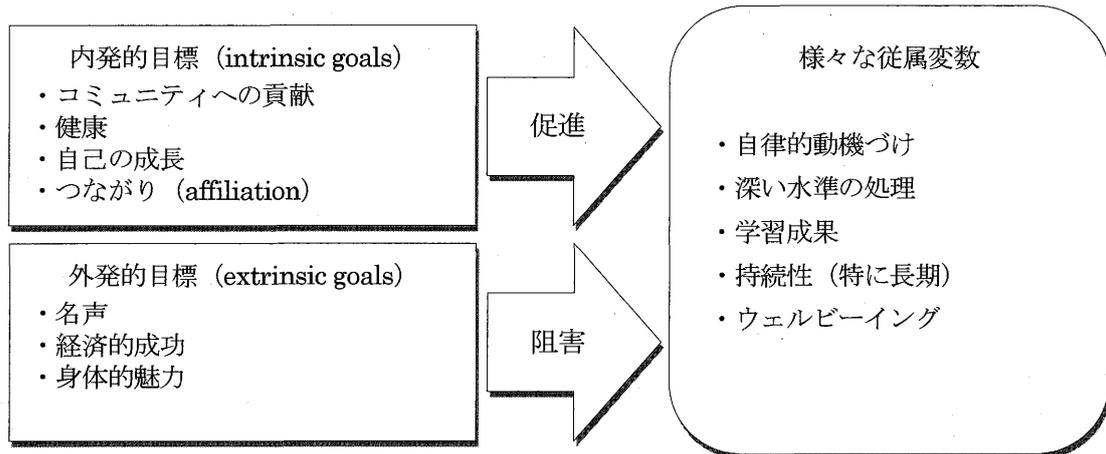


Figure 2 内発的・外発的目標の内容とその効果  
Vansteenkiste, Lens, & Deci (2006) を参考に作成

### (3) 自己決定理論をめぐる疑問

上述した3つのミニ理論を俯瞰すると、以前から指摘されてきた内発的動機づけの概念化をめぐる問題点が明確に浮かび上がってくる。内発的動機づけの研究史を展望した鹿毛（1994）によると、内発的動機づけと外発的動機づけの概念区分は曖昧であり、複数の概念化が混在している。最も広く受け入れられているのは、目的性—手段性による区分であり、学習それ自体が目的の場合は内発、学習が何らかの目的を達成する手段となっている場合は外発として分類する考え方である。同時に、自律性の程度によって、他律的な場合を外発、自律的な場合を外発とする区分も有力であり、有機的統合理論では目的性—手段性の軸と自律性の軸が平行に扱

われていることになる。

しかしながら、鹿毛（1994）によると、そもそも2つの概念化は研究史的な出自が異なるものとして描かれており、鹿毛の展望以降の自己決定理論の展開も踏まえると次のようにまとめることができよう。1つめの自律性による概念化は、人格心理学や社会的動機づけ研究に由来するものであり、価値の内面化や統合、パーソナリティ発達に深く関係している。目標内容理論における内発的目標は、コミュニティへの貢献をはじめとして社会的動機づけに関係する内容が含まれており、内発的動機づけのみならず統合的調整等も含めた自律的動機づけという枠組みを重視する方向に展開していることは研究史的に必然とも言える。それに対して、2つめの目的性—手段性による概念化は、動物の探索行動や認知的動機づけ研究に由来するものであり、興味や好奇心に関係していると解釈することができる。

よって、この2つの軸については概念的に独立の関係にあるとの指摘がなされており（鹿毛, 1995；速水, 1998）、有機的統合理論のように一次元化して描くことには無理があると考えられる。典型的には、統合的調整と内発的調整は、その間に外発（手段性）と内発（目的性）の区分線が引かれ、概念的に不連続なものとして捉えて、統合的調整が内発的調整と同程度かそれ以上に自律的であると想定する必要があると考えられる。こうした問題点を踏まえるならば、2つの概念化の研究史的由来を踏まえた形で二次元的に動機づけを捉え、統合的調整と内発的調整の位置関係について矛盾を解消するのが現実的であると考えられる。

### 3. 擬似内発的動機づけの概念化と自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル

#### (1) 二次元的なモデルと擬似内発的動機づけの登場

自己決定理論の枠組みを援用しながら国内外の動機づけ研究を俯瞰し、自律的動機づけの形成について論じた速水（1998）は、自律—他律の軸と目的—手段の軸を直交させた図式化を行った（Figure 3）。自律的かつ目的的に位置づくのが完全なる内発的動機づけ（内発的調整）で、他律的かつ手段的に位置づくのが完全なる外発的動機づけ（外的調整）となる。そして、自律的かつ手段的に位置するのが、有機的統合理論における取り入れの調整や同一化的調整に相当する動機づけである。ちなみに、統合的調整については、当時まだその概念が動機づけ研究者間に広く浸透していなかったため、この図の中には描かれていない。

この速水（1998）による図式の特徴は、自己決定理論の枠組みでは存在しなかった他律的かつ目的的位置（第二象限）に疑似（擬似）内発的動機づけが描かれたことにある。速水は、「ここで他律的な内発的動機づけは、疑似内発的動機づけと呼び、真の自律的な完全なる内発的動機づけと区別したい」（p.114）と述べ、自分で目標自体を見出す自律的動機づけ（図の右半分）との違いを強調している。すなわち、表層的なおもしろさに着目すると一見内発的動機づけのようであるが、目標自体が他者から与えられた固定的なものである点では実際は外発的動機づけということになる。そして、一定時間たてばそれに慣れ飽きてしまっ、それ以上に興味深い課題が与えられることを期待するようになる危険性にも言及している。

ここで留意しておきたいのは、「疑似内発的動機づけ」という用語が速水（1998）で初めて使われたわけではないことである。使用している漢字こそ異なるが、波多野・稲垣（1971）が「擬似的な内発性の社会的動機づけ」といった表現で、ほぼ同様の現象を述べている。具体的には、擬似的な内発的動機づけの強い子ども为例として、「受験体制のなかで、それも受験のためにしか役立たない勉強を、楽しくつづけていける子ども」（p.168）を挙げ、認知的不協和

理論に基づくと、ウソをつくことの効用が小さいほど、態度自体の変化は逆に大きくなることを踏まえて、「本来疎外されている労働や勉強を、楽しくやっているんだと防衛的に思い込んでしまい、それによって不協和を低減する」(p.169) ことになると警鐘を鳴らしている。

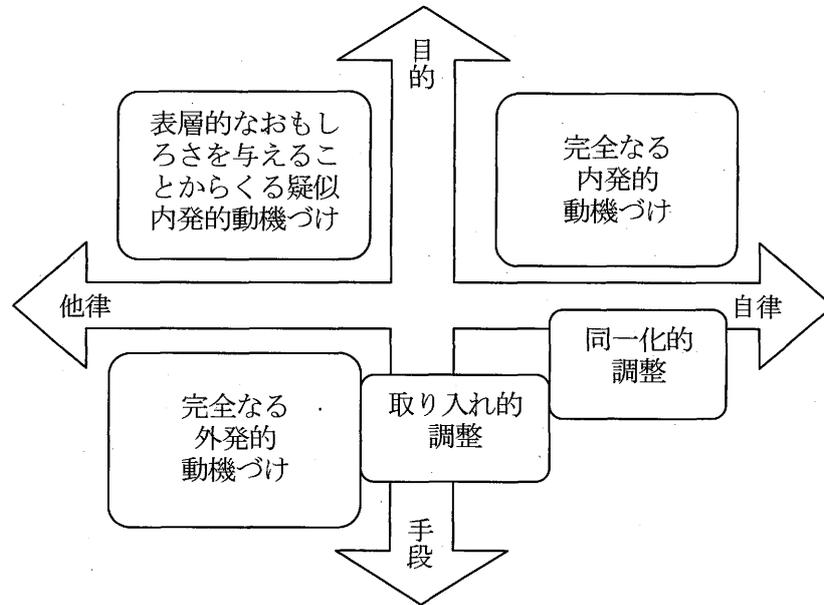


Figure 3 動機づけの二次元分類 (速水, 1998を修正)

さて、国内の文献において「疑似 (疑似)」的な内発的動機づけといった表現が登場するのは、上述した速水 (1998) と波多野・稲垣 (1971) の2篇のみであり、それらを引用した伊田 (2008) や伊田・乾 (2011) などを含めても疑似内発的動機づけについての議論はほとんど見当たらないのが現状である。また、国外の文献に目を向けても、疑似内発的動機づけの訳語として想定しうる“pseudo-intrinsic motivation”, “quasi-intrinsic motivation”, あるいは“assumed-intrinsic motivation”といった表現を用いている論文等は極めて稀である。例えば、心理学文献データベース PsycINFOによると、2013年までの記事の中で1件 (Morgan & Trauth, 2013) のみ“assumed-”が使われていた。一般に公開されている学会発表等の中では、“quasi-”を用いている研究例が1件 (Rughinis, 2013) 見られたが、内面化された外発的動機づけ (同一化的調整や統合的調整) を意味するものとして用いられていた。さらに、“pseudo-”についても海外の学位論文上で用いられている例はあるが、学術用語として必ずしも定着しているとは言えない状況にあり、表記のゆれ (疑似と擬似) や英訳可能性、そして概念定義や研究の方向性を含めて以下に整理を試みたい。

## (2) 本研究における「疑似内発的動機づけ」の概念化

ここで、日本語表記について整理しておきたい。速水 (1998) の用いている「疑似」と波多野・稲垣 (1971) が用いている「擬似」は、特段区別されるものではないかもしれないが、教師をはじめとする指導者側が、あるいは学習者自身が方略として意図的に「表層的なおもしろさ」を用いる可能性もあると考え、本論における以降の議論では、能動的な意味を含めて考え

やすい「擬似内発的動機づけ」の表記を用いることにする。

英語表記についても、上述したように定まったものが見られない。上述した速水（1998）と波多野・稲垣（1971）は、擬似内発的動機づけの問題点や危険性を強調しているのので、そのような意味では、見せかけの内発的動機づけを意味する“assumed-intrinsic motivation”，あるいは偽物の内発的動機づけという意味になる“pseudo-intrinsic motivation”がより適切かもしれない。ただ、本研究では、擬似内発的動機づけが発達や教育の文脈において積極的な意味を持つ可能性についても検討したいと考え、内発的動機づけに準じるものという意味で“quasi-intrinsic motivation”を用いることにしたい。

さて、これまでの理論的な検討を総合して、本研究として擬似内発的動機づけの定義を整理しておきたい。速水（1998）が述べている「表層的なおもしろさ」は、内発的動機づけのような学習内容それ自体に由来するおもしろさではなく、学習内容とは関連の薄い（あるいは無関係な）刺激によるおもしろさと考えられる。また、Figure 3のような二次元的な理解に基づくならば、自律性の程度が高くはないことが挙げられるが、表層的なおもしろさが他者から与えられるのか、それとも自分から作り出すのかによって幅があると考えられる。よって、本研究では、擬似内発的動機づけの概念を「学習内容との関連が薄い（あるいは無関係な）表層的なおもしろさによって生じる動機づけ」として定義し、その表層的なおもしろさを他者が与える場合を「他者喚起型擬似内発的動機づけ」、学習者自身が作り出す場合を「自己喚起型擬似内発的動機づけ」と呼ぶことにしたい。

### (3) 擬似内発的動機づけの二面性

他者喚起型擬似内発的動機づけと自己喚起型擬似内発的動機づけは、字面だけ見れば前者が他律的で後者が自律的であるように見えるかもしれない。しかしながら、本論では、どちらも自律性の程度には幅があると考え、どちらがより望ましいかということをアприオリに決めることなく、それぞれに肯定面と否定面があると考えて議論しておきたい。

まず、他者喚起型擬似内発的動機づけの肯定面として、指導者側の創意工夫によって学習者に表層的な興味・関心を持たせ、それを導入として後に自律的動機づけへと移行する機会を得やすくすることが挙げられる。現象としては学習者が教師に楽しませてもらっているという受動的な姿でしかないかもしれないが、岡田（2009）が論じているように、自律の前段として他律が必要という発想に立つならば、極めて教育的な営みであると言えよう。一方、否定面としては、速水（1998）が指摘するように、指導者側の工夫によって興味・関心が喚起されなかった場合に学習行動が続かなくなるおそれがあること、指導者側の工夫に依存する姿勢を作り出してしまい自律的な学習へと移行しづらくなるおそれなどが考えられる。

次に、自己喚起型擬似内発的動機づけの肯定面としては、同一化的調整等の比較的自律的な動機づけで学習活動に取り組んでいる中で何らかの困難に直面した際、そこで中断・放棄することを避け、学習活動をより長く持続させることに寄与する可能性が期待される。学習者自ら表層的なおもしろさを作り出し、自らの学習行動を維持する営みは、自己調整学習において見られる自己動機づけ方略（伊藤，2009）として捉えることができよう。一方、否定面としては、波多野・稲垣（1971）が指摘するような認知的不協和による態度変容、すなわち本来は楽しくなかった活動を楽しみと防衛的に思い込むような自己疎外が考えられる。これは、近年における「感情労働」や「ゲーミフィケーション」をめぐる議論でしばしば指摘される「やりがいの

搾取」(阿部, 2006)にも重なるように思われ, 自己喚起型というよりは雇用環境を作る側による他者喚起型擬似内発的動機づけの否定面となる場合もあるだろう。

本論では十分な紙数を割くことができないが, 感情労働やゲーミフィケーションの議論においても, 上述した擬似内発的動機づけと同様の二面性について論じられることがある。感情労働について, 伊佐(2009)は, 自律的な教師がストラテジーとして感情労働を用いている可能性に言及しつつ, その自律性が阻害される環境に置かれた場合には負担が大きくなるおそれもあると述べている。また, ゲーミフィケーションについて, Werbach & Hunter (2012)は, 外部(消費者)向けのゲーミフィケーションならば参加者はいつでもプレーをやめられるのに対して, 内部(従業員)向けのゲーミフィケーションでは無意識のうちに隷属状態にさせてしまう懸念など, 倫理的・法的リスクがあることにも言及している。学習場面に置き換えるならば, 学習者を消費者として見るか, それとも知の生産者として見るかによって議論が変わってくるようにも思われる。いずれにしても, 感情労働やゲーミフィケーションは, 動機づけ研究の応用領域に含まれると考えられ, 擬似内発的動機づけ研究の今後の展開において理論的な関係をさらに整理する必要があるだろう。

#### 4. 自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデルの構築

##### (1) 興味と価値に着目した新たな二次元モデル

ここで, 上述した自己決定理論(特に有機的統合理論における統合的調整)および自律—他律と目的—手段による二次元モデル, そして擬似内発的動機づけ(他者喚起型と自己喚起型, それぞれの肯定面と否定面)を包括的に整理し, 「自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル」(Figure 4)を構築する。

基礎となっているのは, 速水(1998)による二次元モデルであり, 図の横軸には自律—他律の次元, 縦軸には目的性—手段性の次元をそのまま用いている。その上で, 目的性—手段性の意味する内容をより具体的に示すために, 興味の発達段階について論じているHidi & Ainley(2008)による状況的興味(situational interest)と個人的興味(individual interest)の区別を対応させた。Hidiらによると, 状況的興味が環境要因による一時的な興味であるのに対して, 個人的興味は学習内容等に関する知識に価値づけを行うことで生じ, 状況的興味から個人的興味へと発達する方向性が示されている。このうち, 個人的興味については, 有機的統合理論が論じている価値の内面化に対応すると考えられ, 図の下部に左から統制的動機づけである外的調整と取り入れ的調整, 右に自律的動機づけである同一化的調整と統合的調整を配置した。また, 図の上部に位置する目的性については, 一時的あるいは瞬間的にその都度の感情が関係する状況的興味を対応させ, 擬似内発的動機づけおよび内発的動機づけを配置し, 下部の各調整段階と名称を揃えて, 他者喚起型擬似内発的調整, 自己喚起型擬似内発的調整, 内発的調整と表記した。

ちなみに, 自己決定理論を援用しているVallerand & Ratelle(2002)は, 3つの水準から成る動機づけの階層構造を描いた。具体的には, パーソナリティとしての動機づけを意味する全体的水準(global/personality level), 学習, 余暇, 仕事などの具体的な生活領域における動機づけを意味する文脈的水準(contextual level), そして各生活領域(life domains)における個別具体的な場面や瞬間における動機づけの状態を意味する状況的水準(situational level)の3水準が設定されている。この階層構造モデルに当てはめるならば, 擬似内発的動機づけの概念

は、状況的水準と関わりが深いように思われる。すなわち、その瞬間における状況的興味の喚起や行動の維持に焦点づけられている。一方で、価値の内面化に関わりが深いのは文脈的水準さらには全体的水準であり、持続的な個人的興味の形成がそこに含まれると言えるだろう。

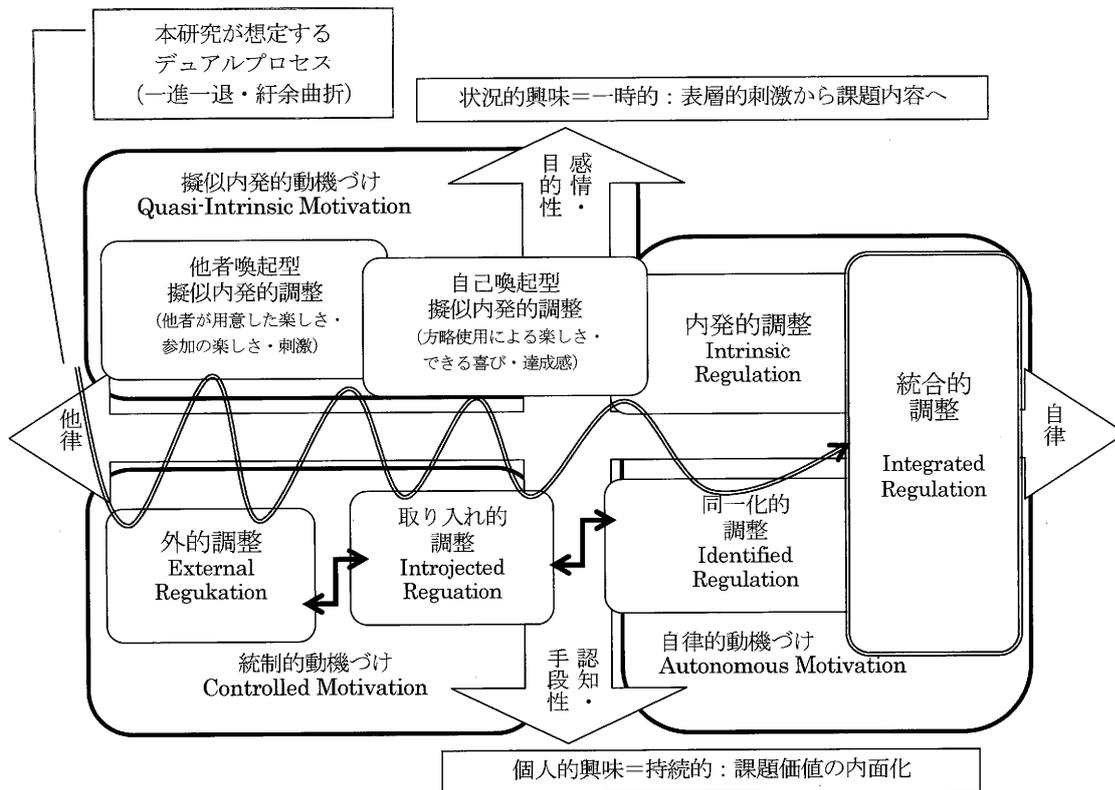


Figure 4 自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル

(速水, 1998および伊田・乾, 2011をもとに作成)

さて、ここで統合的調整の位置づけについて議論しておきたい。Ryan & Deci (2009) による有機的統合理論では、統合的調整の右側に内発的調整が描かれていたが、その間には外発的動機づけ(手段性)と内発的動機づけ(目的性)を区分する線が引かれていた。すなわち、速水(1998)のように二次元化すると、手段的である統合的調整は図の下部に、目的的である内発的調整は図の上部に位置づけられることになる。ところが、Figure 3には当時まだ概念として浸透していなかった統合的調整が描かれず、二次元モデルにおける統合的調整の位置づけについてはその後も議論が深まっていなかった。ここで本論の前半部において有機的統合理論の概略を述べる中で言及したRyan & Deci (2000) およびErikson (1968) に立ち返ると、統合とは単にそれまでの同一化の総和ではなく、むしろ総和以上の何かが立ち現れることを意味しているように思われる。ゆえに、状況的興味と個人的興味の統合という意味を含めて、また、Vallerand & Ratelle (2002) の言う全体的水準に相当する可能性を表現するために、上部と下部を貫いて自律的動機づけの要となるよう統合的調整を描くことにした。

## (2) デュアルプロセスモデルの課題と応用可能性

以上のような議論を踏まえて、Figure 4が示す自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデルについて、今後の研究課題と応用可能性についてまとめてみたい。1つには、図の中央部を左から右へ蛇行しながら示されている「デュアルプロセス」について、まだ仮説段階にあり、質問紙法による調査やケーススタディを通して検証する必要があるだろう。例えば、価値の内面化プロセスと興味の深化プロセスが同時並行的に展開されるという仮定が妥当かどうかの検証をはじめ、価値の内面化プロセスにおいて複数の調整プロセスが同時に使用される場合がありうる（岡田・中谷，2006）のと同様に、興味の深化プロセスにおいても複数の調整プロセスが同時発生することを想定すべきかもしれない。図では、自律の方向へ進む形で1本の蛇行線を描いているが、実際には一進一退やさらなる紆余曲折があるものと思われる。いずれにしても、興味の深化を伴わないような価値の内面化、あるいは価値の内面化なき興味の深化は考えにくいということ、そして興味の深化と価値の内面化が相補的な役割を果たしている可能性などについて議論を深めなければならないだろう。

2つめには、本論で整理しきれなかった目標内容理論や基本的欲求理論など、自己決定理論全体の中でデュアルプロセスモデルのような二次元的理解が、有機的統合理論のような一次的理解よりも理論的な整合性に優れているのかどうかを追究する必要があるだろう。教育学者の岡田（2004）は、「愛着が加わった場合には、大人と子どもという落差にもかかわらず同一化を引き起こし、相手の判断をわが判断とし得るのである。これは往々にして他律の一言で片付けられることの多い現象であるが、自律の敵対物と考えるのではなく、自律の前提としての世界の構造化のための要素蓄積を可能にする機序として理解することが重要である」（p.165）と記している。擬似内発的動機づけが価値の内面化を促し、学習者を自律へと導く潤滑油として機能する可能性があると感じ替えることができそうであるが、基本的欲求理論の視点から考えるならば、愛着という要素が単に関係性への欲求につながるだけでなく、自律性への欲求や有能さへの欲求の充足とどのように関わるのかについて、学習場面における動機づけを例に検証する必要があるだろう。

さて、自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデルの実践的な応用可能性としては、他者と学ぶことが、関係性への欲求を満たす中で、擬似内発的動機づけの喚起にとどまらず、学習それ自体を促進する内発的動機づけにつながる可能性も考えられ、いわゆる「21世紀型スキル」の育成等との関係についての議論も望まれる。また、特別支援教育においても擬似内発的動機づけに関して興味深い事例が見られる。例えば、教材・教具の創作と活用の工夫により知的好奇心を引き出そうとする村上・赤木（2011）の実践例は、擬似内発的動機づけの喚起と内発的動機づけの喚起が同時に追求されているように見える。今後、インクルーシブ教育あるいは共生社会といった理念および合理的配慮といった概念を教育場面で実践に生かす上で、興味と価値に注目する動機づけ理論の果たすべき役割は大きいと考えられる。

## 引用文献

- 阿部真大（2006）. 搾取される若者たち：バイク便ライダーは見た！ 集英社新書
- Erikson, E. H. (1963). *Childhood and Society*. New York: Norton. (Original work published 1950) (仁科弥生（訳）(1977). 幼児期と社会1 みすず書房)
- Erikson, E. H. (1964). *Insight and Responsibility*. New York: Norton. (鏞幹八郎（訳）(1971).

洞察と責任 誠信書房)

- Erikson, E. H. (1968). *Identity, youth and crisis*. New York: Norton. (岩瀬庸理 (訳) (1973). アイデンティティ—青年と危機— 金沢文庫)
- 波多野諠余夫・稲垣佳世子 (1971). 発達と教育における内発的動機づけ 明治図書
- 速水敏彦 (1998). 自己形成の心理—自律的動機づけ— 金子書房
- Hidi, S., & Ainley, M. (2008). Interest and self-regulation: Relationships between two variables that influence learning. In D. H. Schunk, & B. J. Zimmerman (Eds.) *Motivation and self-regulated learning: Theory, research, and applications*. (pp. 77-109). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- 伊田勝憲 (2008). 動機づけから自己をとらえる—学ぶということの意味を通して— 榎本博明 (編) 自己心理学2 生涯発達心理学へのアプローチ 8章 金子書房 pp.141-155.
- 伊田勝憲・乾真希子 (2011). 学習意欲研究における自律性の位置づけ—内発的動機づけの批判的検討を通して— 釧路論集 (北海道教育大学釧路校研究紀要), 43, 7-14.
- 伊佐夏実 (2009). 教師ストラテジーとしての感情労働 教育社会学研究, 84, 125-144.
- 伊藤崇達 (2009). 自己調整学習の成立過程—学習方略と動機づけの役割— 北大路書房
- 鹿毛雅治 (1994). 内発的動機づけ研究の展望 教育心理学研究, 42, 345-359.
- 鹿毛雅治 (1995). 内発的動機づけと学習意欲の発達 心理学評論, 38, 146-170.
- Kasser, T. & Ryan, R. M. (1996). Further examining the American dream: Differential correlates of intrinsic and extrinsic goals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 280-287.
- Morgan, A. J., & Trauth, E. M. (2013). Socio-economic influences on health information searching in the USA: the case of diabetes. *Information Technology & People*, 26, 324-346.
- 村上公也・赤木和重 (2011). キミヤーズの教材・教具—知的好奇心を引き出す— クリエイティブかもがわ
- 岡田敬司 (2004). 「自律」の復権—教育的かかわりと自律を育む共同体— ミネルヴァ書房
- 岡田敬司 (2009). 人間形成にとって共同体とは何か：自律を育む他律の条件 ミネルヴァ書房
- 岡田涼・中谷素之 (2006). 動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響—自己決定理論の枠組みから— 教育心理学研究, 54, 1-11.
- Rughinis, R. (2013). Badge Architectures in Engineering Education-Blueprints and Challenges. *CSEDU 2013 - Proceedings of the 5th International Conference on Computer Supported Education*, 548-554.
- Ryan, R., & Deci, E. (2000). Intrinsic and extrinsic motivations: Classic definitions and new directions. *Contemporary Educational Psychology*, 25, 54-67.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2002). Overview of self-determination theory: an organismic dialectical perspective. In E. L. Deci, & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination theory* (pp.3-33). Rochester: The University of Rochester Press.
- Ryan, R., & Deci, E. (2009). Promoting self-determined school engagement: Motivation, learning, and well-being. In K. R. Wentzel, & A. Wigfield (Eds.) *Handbook of motivation*

- at school* (pp.171-195). New York: Routledge.
- Vallerand, R. J., & Ratelle, C. F. (2002). Intrinsic and extrinsic motivation: A hierarchical model. In E. L. Deci & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of Self-Determination Research* (pp.37-63). Rochester, N.Y.: University of Rochester Press.
- Vansteenkiste, M., Lens, W., & Deci, E. (2006). Intrinsic versus extrinsic goal contents in self-determination theory: another look at the quality of academic motivation. *Educational Psychologist*, 41, 19-31.
- Werbach, K., & Hunter, D. (2012). *For the win: How game thinking can revolutionize your business*. Wharton Digital Press. (三ツ松新・渡部典子 (訳) (2013). ウォートン・スクール ゲームフィケーション集中講義 阪急コミュニケーションズ)
- White, R. W. (1963). *Ego and reality in psychoanalytic theory: A proposal regarding independent ego energies*. New York: International Universities Press. (中園正身 (訳) (1985). 自我のエネルギー—精神分析とコンピテンス— 新曜社)

#### 付記

本研究は JSPS 科研費 25380865 の助成を受けたものである。